

キリスト教大学における建学の精神に関する研究

－最近の研究動向を踏まえて－

Research on the Spirit of Foundation in Christian Universities

－Based on Recent Research Trends－

中 島 賢 介

要旨

本研究は、約20年間の全国のキリスト教大学における建学の精神に関する研究成果を収集し、その動向を分析することで、建学の精神を具現化する際に重要であると思われる点を整理するものである。その結果、各大学が建学の精神について、さまざまな具現化の試みを実施していることが明らかになった。その一方、具現化に向けてはその背景、信徒と未信徒の関係性などの課題も指摘されている。外部評価が必須化している現在、キリスト教教育にもその成果が可視化されることが望まれる。

キーワード：キリスト教大学 (christian university)／建学の精神 (spirit of foundation)／
キリスト教教育 (christian education)／大学評価 (university evaluation)

I はじめに

日本の私立学校は、「私立学校の特性にかんがみ、この自主性を重んじ、公共性を高めることによって、私立学校の健全な発達を図ること」が定められている。文科省のホームページによると、私立学校の特性とは、寄附財産等によって設立・運営されることを原則としているため、建学の精神や独自の校風が強調されたり所轄庁による規則ができるだけ制限されているとしている。そのため、私立学校が改革を迫られる時、必ずといってよいほど「立ち返る」ものとして挙げられるのは建学の精神であるといえる。論文検索サイトの中でも、2016年24本、2017年27本、2018年25本と毎年建学の精神について考察された論文や研究ノートが数多く発表されている。

しかし、建学の精神そのものを批判的に考察したものは少なく、そのほとんどがその精神を自明なものとして扱い、それらは「立ち返る」もので

あり、検証するものであり、再出発を論じるものである。本研究は、国内のキリスト教大学が持つ建学の精神研究を取り上げ、それらの内容を精査することで研究動向を考察するものである。また、それらを参考にしながら建学の精神を具現化するモデルを構築する。

II キリスト教大学の建学の精神

まず、全国のキリスト教大学（キリスト教学校教育同盟57大学、日本カトリック大学連盟18大学、非加盟大学3大学）における建学の精神（理念）、教育方針、スクールモットーなどをホームページ（HP）や大学案内などから、建学の精神にはいかなる特徴があるかを閲覧し抽出した。

そのいずれもがキリスト教の精神に基づいていることを標榜しているが、詳細には次のような特徴があることが分かった。

- ・ 聖句そのものが建学の精神となっている。（金城学院、中部学院、北陸学院など）
- ・ 聖句のキーワードが建学の精神となっている。神については畏神、敬神、愛神など、愛につい

ては神の愛、隣人愛、共愛、愛と奉仕、信仰・希望・愛、人類愛など、その他には地の塩・世の光などがある。(茨城キリスト教、共愛学園前橋国際、山梨英和など)

- ・創設者の遺訓が建学の精神となっている。(酪農学園、弘前学院、関西学院など)
 - ・宗派(プロテスタント、カトリックなど)を標榜している。解説文には正確に教派が示されている。(三育学院、神戸松陰女子学院、白百合女子など)
 - ・学術研究の姿勢・教育の姿勢(真理の探究、リベラルアーツなど)を標榜している。これらは建学の精神を寄附行為の第1条として採用している。(東京女子、敬和学園、清泉女学院など)
 - ・学問領域の専門性が標榜されている。(国際、看護保健・公衆衛生、芸術など)(国際基督教、聖路加国際、エリザベト音楽など)
 - ・四字熟語などで表現されている場合、3つの柱を建てている。(敬神奉仕、敬神愛人、愛神愛隣、感恩奉仕、敬天愛人など)(東洋英和女学院、名古屋学院、神戸女学院など)
- これらの建学の精神が基本理念、教育の方針として受け継がれ、スクールモットーとして心に刻むことができるよう工夫されていることが分かった。

Ⅲ 最近の研究動向 一先行研究の論点整理一

森(2003)は、キリスト教科目と建学の精神に関する論考で、現代は宗教間の対話が必要な時代だと位置づけ、大学の建学の精神も開かれた健全な歴史観に基づいて新時代の洞察と折衷しながら継承するあり方を提唱している。

山城(2005)は、建学の精神とキリスト教について、鎮西学院の創始者C.S.ロングからJ.ウエスレーにまで遡り、歴代の院長校長に引き継がれた精神について、彼らがそれぞれ遺した言葉を引用して考察している。

土井(2001)は、大学の財務状況を示した上で改めて建学の精神を問う論考、「大学が何らかの点でゆれている時、『欠け』が意識される時、再建ないし補強のために必要とされる」のが建学の精神だとする論考を発表している。

船本(2008)は、そもそも学問は科学技術の信奉することによる人間楽観主義や人間至上主義の上に立つのではなく、「一人の人間を真実に問題とし、個なる人間の魂の葛藤、すなわち人間の罪と弱さを真実に問題にする教育であらねばならない。」としてキリスト教教育の存在意義を明確にしている。さらに「その意味でキリスト教教育は、現代の知識偏重、学歴社会、人間至上主義といった風潮に対して疑問を提示する教育であると言える」と主張している。

深谷(2009)は、「キリスト教学校は、繰り返し聖書に立ち返って建学の精神を明確に自覚し、その上に立って絶えず見張っていなければならない時代に入って来ている」として、「福音主義キリスト教学校に基づく人格形成を中心に据えてその教育を進めることなしには、キリスト教学校の存在意義はありません。このような教育こそ真の創立者なる神から信託された教育であり、それを進めることがキリスト教学校に共通の真の建学の精神」であると述べている。

大西(2015)は、開国から現代に至るまでのキリスト教教育史を概観し、未来に向けて5つの提言を行っている。提言の一つに「キリスト教学校教育の理念の明確化と一致」を掲げ、「キリスト教教育とは何か。それを実践するキリスト教学校とは何か。そしてその教育目標とは何かを非キリスト教教職員にも理解し、共有できる形で明確に示していかなければならない」としている。

これらの著作、論考を整理すると、次のような視点が提示されていることが分かる。

- ① 多くのキリスト教大学が運営に関して問題意識を持ち、建学の精神に立ち返ろうとしている。
- ② キリスト教大学ではそれぞれの創立以来、キリスト教教育を継続発展させてきたが、今一度理念を明確にすることが求められている。
- ③ 現代のキリスト教大学において、他宗教、学生、未信徒教職員との対話の中からキリスト教教育のあり方を構築していくことが求められている。その対話の中でキリスト教教育のあり方が明確になる。

Ⅳ 具現化に向けての課題

船本(2008)は次のように述べている。

キリスト教学校はそれぞれ建学の精神を掲げその理念に従って教育・研究の営みを続けて来た。それはまさに土台であり、変えてはならないものである。しかし問題は現実に建学の精神が如何に理解され具体的に生かされ教育共同体の共通の理念・目標とあっているか否かということである。(下線論者)

深谷(2009)も次のように述べている。

私学は建学の精神によって存在します。私学が建学の精神を堅持し、その教育の基本理念を生かして、特に国公立の学校では出来ない教育を推進し、深めること、またそのためのシステムと教育力を絶えず錬磨することは、この意味で重要です。中でもキリスト教学校は、その建学の精神であるキリスト教に基づく教育のゆえに存在するのです。(p.37)

(下線論者)

さらに土井(2001)も次のように述べている。

「キリスト教主義」大学であるとか、「建学の精神」ということをいくら叫んでみても、宣伝してみても、それが、大学教育環境のなかでどのような形であらわされ学生や地域社会に認知されて行くのかという「建学の精神の具現化」という問題のほうが重要である。だからこそ、キリスト教主義大学で「建学の精神」を具体化かつ明確化して行くことが求められているのである。(下線論者)

このように、建学の精神は大学教育の中で理解され、具体的なシステムと教育力の中で磨かれ、学生や地域社会に認知されていくことが重要であるということは繰り返し強調されてきた。しかし、建学の精神が具体的にどのように実践され、どのような学内外の評価につながっているのかという点については現時点で実施しているものを挙げるだけでそれらが実際に機能しているかどうかについての検証はなされているかどうか。少なくとも、最近の建学の精神に関する論考を見る限りにおいてはほとんどないといってよい。

山本(2013)は、高等教育現場におけるキリスト教に対する意識調査の結果について、次のような報告を行っている。

- ① キリスト教主義教育の意識化・明確化と信仰の押し付けの混同が見られる。

- ② 日常生活を通して実践すべきプログラム間の連携に課題がある。
- ③ 教職員間に、キリスト教主義教育、キリスト教的な素養・建学の精神に関する見解の相違・情報量の差が存在する。

これまで挙げてきた研究報告によると、この報告に見られる状況は一キリスト教大学に限ったことではなく、他大学においても見られる状況である。土井が指摘するよう建学の精神が問題となる時は、その大学が何らかの問題を抱えていると考えられるからである。山本は敢えてアンケートで得られたデータを公表し、通常では顕在化しないような教職員の意見を敢えて掲載することで、全国のキリスト教大学に対して行った問題提起であると捉えることができるとしている。また、こうしたデータの検証を行うことで、キリスト教教育の運営者側とキリスト教教育に取り組む教職員側との溝が埋めることができるのではないかと主張している。

谷口(2015)にも建学の精神の具現化に際して次のような課題を挙げている。

- ① 具現化が部分的に止まっていて、システム化の方向性が不明瞭である。
- ② 一般教育担当者と専門教育担当者との間にある「世界市民科目」や「共通科目」に対する姿勢の相違がみられる。
- ③ 研究と教育の連関性が停滞している。
- ④ 全教職員による具現化に対する取り組む姿勢が停滞している。

以上のことから、大学全体が建学の精神であるキリスト教教育を実践する際には、建学の精神そのものが否定されることはない。けれどもそれを具現化する際にはハード面、ソフト面、そしてパーソナルな側面において課題があるということが分かった。

V 具現化に向けての方策

先述したが、山本(2013)のように、まずは忌憚のない意見を収集し、キリスト教教育を行う上での課題を整理することが求められる。山本は、キリスト教教育を行うことに二の足を踏んでいる現状の中にも、「キリスト教主義の学園で働く者として、もっと(既に基本はあるが、それ以上に)

キリスト教や建学の精神についての情報や知識を得たい」と考える教職員が相当数いるといった肯定的な側面を見出している。こうした意見をキリスト教教育を担当する者がどこまで吸い上げることができるか、具体的な形で学びの場を提供することができるかということが重要になってくるという点を指摘している。

また、建学の精神を積極的に具現化するには慎重論を唱える者が存在する。キリスト教教育が学生や未信徒の教職員には「押し売り」になってしまうのではないかと危惧しているとの指摘もある。慎重になり過ぎて結果的に具現化に資することができなかつたというのでは、具現化する可能性を摘んでしまうことにもなる。

山本のように、教職員の意見を一つ一つ整理し、対話することが重要であるの指摘も重要であるが、キリスト教大学の教職員として信仰に向き合うモデルケースを提示するというのも具現化の方策の一つであると考えられる。

文(2018)は、名古屋学院大学の前身である名古屋英和学校の教師として赴任した内村鑑三が建学の精神である「敬神愛人」から受けた影響を取り上げている。内村が当時強調していた「キリスト教的兄弟愛」は「敬神愛人」を源流としていたことを明らかにすることで、大学に集まる学生や教職員の建学の精神に対する関心を高めることをねらいとしている。「2つのJ」を提唱した日本の代表的思想家が、若き頃自分を捉えて離れなかつた精神的な虚しさ(真空)から立ち直る過程を英和学校の教師として過ごしている。そこで学生に対して「キリスト教的兄弟愛」を熱く語るという具現化に努めた。文が内村を描く際に、日本の思想家という姿ではなく、建学の精神を具現化した人物の一人として映る。そのことが学生や教職員に親近感を持たせると同時に建学の精神に関する知的好奇心を満たすことができるという効果があると考えられる。

塩谷(2008)は、先述した通り、建学の精神に異を唱えた一教員に対して、それを拒否するのではなく、教員の主張の一つ一つの疑問に答えるという形で具現化を図っている。建学の精神とえば、院長、学長、宗教主事といったキリスト教教育を担当する者が中心となり、信徒の教職員の力

を借りながら具現化を図りがちである。そのため、見えない壁、すなわち無意識の排他性が学生や未信徒の教職員が外側に追いやられる場合がある。外に追いやることがなくても、信徒、未信徒を区別して考えてしまう傾向がある。それは、学生や未信徒の教職員が大学の運営にかかわることができない、いわばお客さんの状態になってしまうことを意味する。

塩谷は一教員の疑問と論考の中で、対決ではなく対話しようとしている。キリスト教だけではなく仏教との対話も試みている。聖書の話と仏教説話に類似した内容のものがあることを例に挙げる。また、仏教者とキリスト者を比較して、「仏教者には慈悲と知恵・知識に満ちた立派な人格者も多いように思う。それに対して、キリスト教の聖職者、修道者は軽々しく、知識分別に欠ける人が多いかもしれない」といった印象を挙げながらも、聖書の教えが仏教のそれと異なる点を指摘する。一教員の疑問の真摯に向き合うことで、自らの置かれた立場を再認識することから建学の精神を具現化を出発させようとしている。宗教間の対話については、森(2003)も、欧米のキリスト教大学が抱えたセクショナリズムや世俗化の反省を踏まえて、現在の大学では他宗教との対話を積極的に行っていると報告している。

一大学、一教員が建学の精神の具現化を図るというスタイルがある一方で、他大学と協働することでそれぞれの建学の精神の具現化に対する課題を明確にするというスタイルもある。

2017年9月、中部学院大学・同短期大学部と北陸学院大学・同短期大学部は教育研究や地域連携に関する連携協定を締結した。それを機に、建学の精神の具現化に向けて、協働的な実践研究に取り組んでいる。それぞれの建学の精神制定の経緯や具現化に向けて、主にチャペル活動に焦点を当てて、課題整理を行っている。高木ら(2018)の共同実践研究は第1報となっており、今後具現化に向けてその全体像が明らかになることを期待したい。

VI 考察1 建学の精神と大学、学部の教育

ここで重要なことは、大学におけるまず建学の精神の位置づけである。最初に図1のような構造

が考えられる。

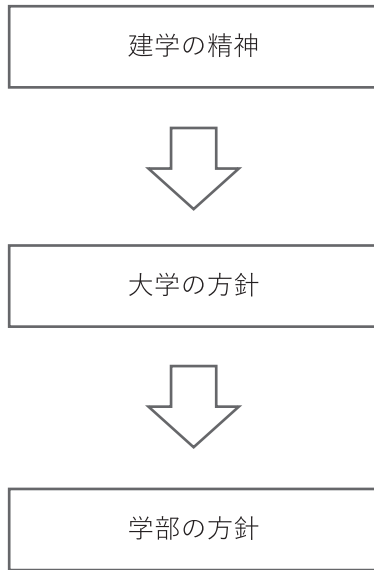


図1 建学の精神 上部概念

建学の精神が崇高なものとして捉えられ、現実とは切り離され、指向するだけのものであるという考えが提示されているということである。崇高なものとして、常に上部概念として隔離したままであると、それが放置されることになる危険性がある。現に、キリスト教教育の中核をなすはずの礼拝が全学生、全教職員とともに守られないといった、いわば建学の精神が棚上げされ放置されたままになっていると指摘している大学も存在していることがこれまでの研究から明らかになっている。

次に図2のような構造が考えられる。

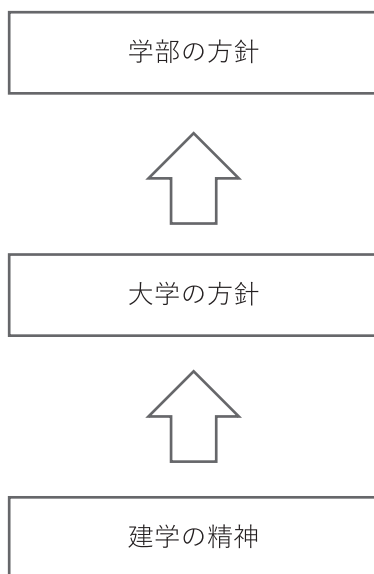


図2 建学の精神 下部概念

逆に考えると、建学の精神は建築で言えば基礎であり、礎石であるということもできる。その土台の上に、会堂や校舎が建てられ、カリキュラムが構築されている。建築物が如何に建て替えられようとも、またカリキュラムがいかに変更されようとも、土台の確かさがあってこそ揺るぎない大学運営ができるということも考えられる。しかし、一方で現実の教育活動は教育政策に翻弄され、日々の業務に忙殺され、土台を見失ってしまうという状況を生み出している。

これらのように、建学の精神を切り離された上位概念や揺るぎない土台としての基本概念とする考え方は明確のように見える一方、日常的に中心に据えられていないがゆえに、創立記念日などの時だけ思い起こすといった状況に陥るのではないだろうか。そこで、図3のような構造を想定した。

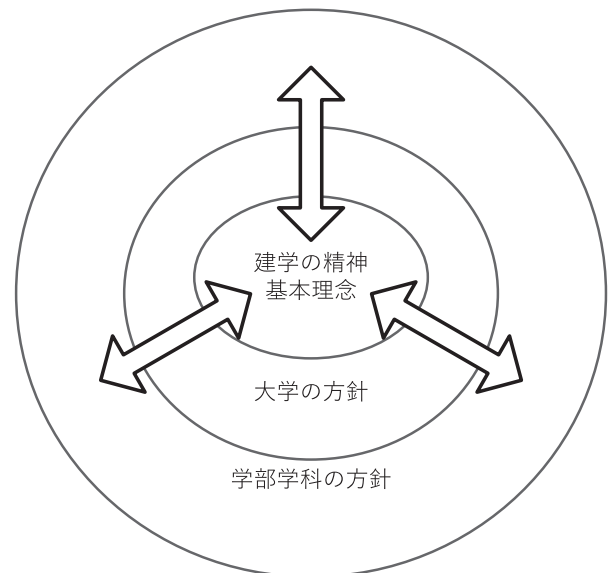


図3 建学の精神 中央概念

建学の精神を大学の中心に据え、常にその具現化のために施設設備などのハード面やカリキュラムなどのソフト面を整備する。これら具現化されたものが建学の精神にかなったものとなったかどうかの検証する際、まずは冒頭に行うといったことの往復運動を習慣化することを提案する。建学の精神は大学におけるすべての教育研究活動に貫かれている原理原則という考え方も存在している。その場合、建学の精神は崇高なものでありながら、それは常に「実践されているもの」として捉えることができるのである。例えば、カリキュラムを

検証する際、建学の精神よりも他の条件が優先されていないかといった項目を設ける。もし他の条件が優先されているのであるならば、回り道をしてでも建学の精神に適合する方策を検討し実行するなどの改善が必要である。

VII 考察 2 建学の精神の段階的な具現化

谷口(2018)は建学の精神の具現化において授業改革は重要ではあるが、「しかしながら、それは『建学の精神』、『教育理念』、『カリキュラム』との関連のなかで、スパイラル・アップしたプロセスのなかにあるのではないか」とし、大学を取り巻く現代の社会、環境との関連で建学の精神や教育理念を常に再解釈することがより重要であり、その上でカリキュラムや授業を改革すべきであるとしている。

これまでの研究動向やそれぞれの主張を吟味した上で、建学の精神を具現化するためには、スパイラル・アップしたプロセスが求められると考えられる。

具体的には、次のような6つの段階を設けて、第6段階の次にはさらにレベルアップした第1段階に戻るといったスパイラル・アップモデルを想定してみた。

- 第1段階 建学の精神の教職員理解
具現化に向けての方針立案
- 第2段階 学生への指導・学修活動の実施
- 第3段階 学生の学修成果
- 第4段階 内部評価の実施
- 第5段階 建学の精神の具現化 総合評価
- 第6段階 学外による評価

第1段階 建学の精神の教職員理解・具現化に向けての立案(観点別評価を含む)

建学の精神が私立大学の根幹をなすものであるため、その精神そのものが十分に反映できる教育方針の基礎となる。その教育方針を理解しやすくしたフレーズがスクールモットーである。学校教育法施行規則によって示された3つのポリシー(アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー、以下、AP、CP、DP)について、私立大学には「各大学の建学の精神や強み・特色等を踏まえた自主的・自律的な三つのポリシーの策定と運用の参考指針」が示されている。

これらを明確にすることで高大接続改革が行われていることからしても、建学の精神の具現化は急務である。とはいえ、建学の精神が掲げられていても、それらをどう具現化するかが示されていないければ、「絵に描いた餅」に等しい。そのためにも、教育方針やスクールモットーへの明文化、具体化が必要である。さらに、キリスト教教育を受けることによってどのような成果を上げることができるという点について真摯に取り組むべきである。キリスト教教育が陥りやすい問題として、キリスト者が自明のこととして物事を運んでしまうために、未信徒の学生や教職員との間に存在する距離感に気づかないことがある。教育学のあり方として、まずは大学が学生自体の学び舎であるとの認識を持ち、一つ一つの事例を積み重ねながら理論を構築するということがある。演繹的な思考と同時に帰納的な思考に立ち、学生がどの程度まで理解し行動できたかといった評価の観点を構築する必要がある。

また、建学の精神の具現化の作業と並行して行われる必要があるのは、それらが教職員の中で十分に理解されることである。山本(2013)が指摘した教職員アンケートは注目すべき要素が盛り込まれている。建学の精神が教職員全員に理解されることの必要性は説かれているものの、それらが具体的にどの程度浸透しているかといった点については言及されていない。山本は敢えて教職員一人一人の声を掬い取っている。これを量的な取り組みとするならば、塩谷(2008)は、質的な取り組みであるといえる。塩谷は、大学が掲げるキリスト教ヒューマニズムに疑問を呈した一教員の声を丁寧かつ正確に解答している。こうした量的・質的な取り組みなくして教職員の理解は得られない。未信徒の教職員にとってキリスト教教育は理解するもので信仰の対象にはなっていないからである。

第2段階 学生への指導・学修活動の実施

全教職員に対して礼拝を中心としたキリスト教教育の理解が進めば、学生に対する指導教員や学修の仕方が具体化される。教員は、毎行われるFD(Faculty Development)において、職員はSD(Staff Development)において、特にキリスト教教育は全教職員の協力が必要であるため、合同で

行われることも検討したい。

注意すべき点は、大学のすべての活動にキリスト教教育の観点が盛り込まれることによって、学生や教職員にキリスト教に対する距離感や拒否反応が生まれる可能性が指摘されることである。しかし、この論の多くが活動の趣旨やキリスト教教育とどのような関連性があるかを予め説明を徹底していない場合や、学生が主体的に参加できない活動であったりする場合に生じる問題である。教職員が理解し、学生に対する説明責任を果たせば距離感や拒否反応は軽減できると思われる。

第3段階 学生の学修成果

今回の学習指導要領の改訂で、学生は高校生までで「主体的で対話的な深い学び」を体験することとなる。これは大学におけるアクティブラーニングに直結するものであるため、授業や活動一つ一つに自分が主体的に参加できたか、人や書物などとの関わりを深めることができたかなどの自己評価の習慣付けは比較的容易になされると期待される。大学としては、単なる到達度で評価するのではなく、ルーブリック評価などで多面的に学習成果が評価する手法を用いることによって第4段階へと進むことができる。

第4段階 内部評価の実施

大学教育の場でも取り上げられている課外活動、地域との連携事業などについても、活動の一つ一つの評価項目にキリスト教教育の観点からどう評価できるかという点についても検討することが考えられる。

先述した通り、学修成果は可視化されれば、それが客観的評価につなげることができる。この評価については、大学が学生を評価するだけでなく、学生が教員を評価する、教員が教育研究活動の自己評価を行うなど、双方向性の評価を行うべきである。それは、大学におけるすべての人間が等しくキリスト教教育を具現化する者であるからである。

第5段階 建学の精神の具現化 総合評価

谷口(2015)の視点によると、カリキュラム改革などのソフト面、学生や教職員といったパーソナルな側面に加え、礼拝堂や校舎などのハード面についての具現化も合わせて行うべきである。これらすべての評価が総合的に行われることで、そ

れらの改善点や新たな目標などが設定される。

第6段階 外部評価

こうした不断の努力を行うことによって、外部評価に耐えうる大学として成長する。大学教育が自己満足、自家撞着に陥らないためにも外部評価は必要である。地域社会や高等学校など、直接外部評価を依頼することで建学の精神がより浸透することを期待したい。

VIII おわりに

今回は、最近発表された著作、論文などから建学の精神に関する研究の動向を概観し、建学の精神を具現化する方法について検討することができた。現在の大学教育は、前世紀のような知識伝達型の講義の実施や、学生と教職員の間で人間関係を築くことが非常に困難である。だからこそ、建学の精神を具現化すべくキリスト教教育が可視化されなければならない。

今後は、このモデルを実際に活用してキリスト教大学の持つ独自性をより明確にしていきたいと考える。

〈引用文献・参考文献〉

- 大西晴樹(2015)『キリスト教学校教育史話：宣教師の種蒔きから成長した共同体』教文館
- 落合建仁(2017)「金城学院大学におけるキリスト教教育の歩み ―時代背景との関わりで―」『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』第20巻 p.23-55
- 学校伝統研究会編(1997)『キリスト教学校の再建 ―教育の神学第2集』聖学院大学出版会
- キリスト教学校教育養成事業委員会編(1991)『キリスト教学校教育の理念と課題』キリスト教学校教育同盟
- 倉松功・近藤勝彦(1998)『キリスト教大学の新しい挑戦』聖学院大学出版会
- 塩谷惇子(2008)「愛と知性を育む大学文化の伝承 ―建学の精神・キリスト教ヒューマニズムの源泉を汲む―」『清泉女子大学紀要』第56巻 p.59-75
- 四国学院大学キリスト教教育研究所編(2005)『大学とキリスト教教育』四国学院大学キリスト教教育研究所叢書 新教出版社
- 高木総平・楠本史郎・志村真(2018)『「建学の精神」に関する大学間連携による共同実践研究(第一報) ―その具現化としてのチャペル活動―』『中部学院大学・

中部学院大学短期大学部 教育実践研究 第4巻
p.143-151

谷口照三 (2015)「桃山学院大学に於ける『建学の精神』
と教育研究 - 「キリスト教精神」への回帰動向と今
後への課題-」『桃山学院大学総合研究所紀要』 第
41巻 第2号 p.55-78

塚田理 (2002)『日本におけるキリスト教学校』リトン
土井省吾 (2001)「建学の精神と大学の財務」『四国学院
キリスト教教育研究所年報』 第8巻 p.28-55

西原廉太 (2009)『現代に生きるキリスト教教育』ドン・
ボスコ社

深谷潤 (2018)「西南学院のキリスト教と人間科学部：
建学の精神とカリキュラム」『西南学院大学 人間科
学論集』 第13巻 第2号 p.189-199

深谷松男 (2009)『キリスト教学校と建学の精神』日本
キリスト教団出版局

船本弘毅 (2008)『人を生かすキリスト教教育』創元社
文禎顯 (2018)「名古屋学院大学建学の精神『敬神愛人』
の源流を探る -内村鑑三の「真空 (vacuum)」概念
を手掛かりに-」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』
第55号 第2号 p.287-314

森真弓 (2003)「宗教間対立時代のキリスト教大学 -キ
リスト教科目と建学の精神-」『北星学園大学社会福
祉学部北星論集』 第40号 p.77-92

山城順 (2005)「建学の精神とキリスト教教育」『長崎ウ
ェスレアン大学現代社会学学部紀要』 第3巻 第1
号 p.47-74

山本有紀 (2013)「高等教育現場におけるキリスト教主
義教育のこれから：松山東雲の場合 -教職員アン
ケートから見えてくるもの-」『松山東雲女子大学人
文科学紀要』 第21号 p.121-150